

追 悼

師匠を偲んで

旭 川 清 野 玄 義

思い起こせば、昭和34年私が陸上自衛隊に入隊し、翌年2月、師団スキー大会回転の部でデビューし、その直後から師団の回転要員として選抜されました。それが大野先生とのお付き合いの始まりでした。

以来、雪が降り始めるとニセコチセヌプリ、伊の沢、雨紛、神居山（砂金沢含む）等でスキーの練習。特に、神居山（現カムイリンクス）は、国道12号線から林道を歩いて登るのですが、スキー道具は雪上車で運んでもらい、私達は師匠を先頭に1時間30分程、休憩なしで登りました。

師匠は常に「俺についてこい」の一言。練習は午前1本、午後2本滑って終了ですが、有り難かったことは、当時この山にあったアンテナ基地で暖かい昼食を頂けたことが記憶にあります。

師匠は「斜面の遠くを見て滑ろ！谷足の中心に荷重して物を拾わず（転ぶな）、一気に滑り降りろ！」が口癖でした。神居山では「物を拾わず」滑り切るのは20数名中、師匠と数名の選手でした。私も、物を拾いながら滑る一人でした。

私は、土曜午後と日曜日は伊の沢スキー場で練習、ナイターはなく、スキー用具は当時のヒュッテに預けてバスで通っておりました。

自衛隊の大会が終わると、2月末から4月中旬まではローカル大会の転戦が始まり、当時自家用車を持っている人が少ない中、師匠の車で富良野北の峰、遠軽瀬戸瀬山（現在無し）、名寄九度山（現ピヤシリ）、奥白滝天狗岳（現在無し）、最終4月上旬は幌加内幌立山で、大回転と回転（幌立山のみ）に参加しました。各スキー場にはリフトが無く、全てツボ足で師匠を

先頭にインスペクションしながら、落とし穴の攻略方法を教わりながらスタート地点まで登ったものです。スタート前にもう一度攻略法を復習後スタートしましたが、登りも、レースも師匠の前に出ることはありませんでした。

昭和37年3月の遠軽瀬戸瀬スキー場での大会で、師匠が1位、私が2位に入り、少し近づけた思い出のレースでした。

思い出に残るエピソードが・・・・

昭和37年神居山砂金沢で、1人で練習していた高校生Y君に師匠が「一緒にポールに入って滑ろうか」と、声をかけたことがきっかけで当時就職も内定していたY君は、その就職先を蹴って昭和38年4月に自衛隊に入隊してしまったことです。

その後、自衛隊の指導者として多くのスキーヤーを育てました。

また、夏は師匠の家の庭の手入れ、冬は雪が降るたびに家の除雪にと、つい最近まで手伝いに来ておりました。これはY君本人の師弟愛であり、師匠の誰に対しても優しい心遣いと包容力の広さの表れとして、後々まで語り継がれることでしょう。

私はスキーを通して1から10まで、人としての生きざまを教えて頂きました。



清野副会長



2018年3月大野末松先生の卒寿を祝う会にて（前列右から3人目）

この教えを多くのスキーマーに伝えていきたいと思っています。

どうぞそちらの世界で、旭川スキー連盟教育部の発展に尽力された今村源吉先生はじめ、多くの人達とスキー談義に花を咲かせ、ごゆっく

りお休みください。

合掌

旭川スキー指導員会副会長

